

ノウフク・アワード2021グランプリ

京丸園・代表 鈴木厚志さん(57)

さんさん山城・施設長 新免修さん(46)



障害者や老若男女が働きやすい「ユニバーサル農園」を実践する。グランプリを受賞し「障害者が一緒に働くことが当たり前」と言われる社会にしたい」との思いをより強くする。



「生きづらさを感じている人が社会で活躍していることを評価してもらった」。グランプリ受賞をさうかみしめる。



ろう者活躍の社会へ

福祉の力で農業強く

「以前は障害者が働くのは難しい」と面接も断っていた。頼まれて1週間の研修を受け入れてみると考え方は、がらりと変わった。

「彼らをサポートしよう」と、職場の雰囲気や働く環境が良くなった。彼らの「すずき・あつし」1964年、静岡県浜松市生まれ。農家の13代目。同市で水耕栽培の芽ネギやチンゲンサイなど1・3畝、水田1畝、畑1畝を営む。

「1997年に1人目を雇用。彼らがやりやすい形態をつくると、みんなが働きやすくなる。何をやるべきか気付かせてくれる」と経営強化に欠かせない存在になった。今は従業員96人のうち22人が障害者。施設に通う人の受け入れも含めると37人が働く。自社の面

「2日も実現し、「夢のよう」と感謝する。残念な記憶がある。20年ほど前、近くの農園で働いていた障害者が突然、姿を見せなくなりました。「お宅の野菜は汚い」とあらぬことを言われ、農園も解雇せざるを得なかったのだという。賞への応募や取材を受けるのは、そんな偏見を変えたい。福祉の力で農業を強くする」。

多様な人が活躍できる社会を目指し、農福連携が秘める可能性を確信する。(別巻2頁)

「しんめん・おさむ」1975年、京都市生まれ。2021年に福祉事業所として認定農業者になった。京田辺市で宇治茶やエビイモなどを1・2畝で栽培する。

「つながることができると農業に着目した。露地栽培で台風など多くの苦労があったが、今では手がけた野菜が一流ホテルでも扱われるようになった。「食に携わる仕事だから得られる喜びだ」。事業所利用者の励みになっていると手応えを感じる。

17年から運営するカフェは、料理から全て自分たちで考案する。「おいしい」「利用者の笑顔が素敵」と、たくさんのお客様が訪れる。

事業所利用者32人の8割は聴覚障害者。面倒見が良いなど、ろう者の持つ力を感じた。一方で虐げられて苦労するのも仕方がないと思う人を見て、理不尽さを覚える。「ろう者も活躍できる社会に変えたい」。事業所はその発信拠点だ。

韓国で開かれた持続可能な開発目標(SDGs)関連の国連会議にも参加した。地域の人が野菜セットを買い支えてくれて、参加費用を確保した。農福連携が地域との連携も生み出した。

「商品の質だけでなく、さんさん山城そのもののブランド価値を高めたい」と決意を新たにす